

教職科目授業アンケート調査分析

分析WG委員による討議 2023/10/6 より

分析WG	主査	教育学部	サルカール・アラニ教授
	委員	文学部	宮地朝子教授
	委員	理学部	大成誠一郎准教授
	委員	農学部	野村信嘉准教授

[分析方法と視点]

前回の調査分析（2019/10/2）より4年間が経過しているため、今回の調査分析においては2019年度から2022年度までの4年間、合計8回分のアンケートにより現状把握と課題を探ることにした。また、アンケート結果はこれまでも担当教員にフィードバックしているため個々の授業科目の分析ではなく、前回と同様に教職科目全体に関する課題を探る視点から結果の分析を行った。しかし、2019年度が旧課程かつ対面授業中心であったのに対し、コロナ禍となった2020-2021年度は遠隔授業が中心、2022年度は回復期かつ新課程が本格始動となった。それぞれ状況が異なる点を勘案しながら振り返る必要がある。

[全体の傾向と総評]

前回の調査分析(2015年度から2018年度春学期)で学生の評価と満足度は概ね高いという結果が報告されており、今回の8回の授業評価アンケートでは全体的にさらに高い評価が得られた。

まず、学生への質問では、授業に意欲的・自発的に取り組むことができたという肯定的な回答が90-95%(平均93%)であった。前回の調査では、授業に意欲的・自発的に取り組むことができたという肯定的な回答は80~91%であったことから、今回の調査では意欲的かつ自発的に授業へ取り組めたという回答が明確に増加した。また、学習内容を理解できたという回答が94-99%(平均97%)、授業の欠席が0~1回という回答が82~98%(平均89%)であった。授業の欠席についての質問では、前回の調査で0~1回の欠席という回答が82~89%だったことから、今回の調査では、上限が9ポイント高くなった。年度毎の回答を分析すると、2020年度(92~98%)と2021年度(90~93%)の2年間は特に高く(90~98%)、新型コロナ禍でリモート授業の影響による可能性が考えられる。一方で

通常の授業形式の 2019 年度および 2022 年度(82～89%)は、前回調査と同様の結果であった。リモート授業を取り入れることで、出席の割合が高まる可能性が考えられる。

担当教員と科目内容の質問に対して、授業がシラバスに沿っていたかについては、肯定的な回答が 98～100%(平均 99%)と極めて高く、担当教員が十分に授業の事前準備をされていたことが伺える。また、担当教員の熱意・工夫を感じたという回答が 93-97%(平均 95%)であり、前回(91～95%)よりさらに高い評価が得られ、各授業が絶えず改善されていることの表れと考えられる。教員になったときに役立つ授業だったかという質問については、肯定的な回答は 90～98%(平均 95%)であり、前回の調査(88～96%)よりさらに高くなった。

自由記述によるコメントには、授業の感想、授業方法と内容への要望など、様々な意見があった。授業内容や方法については、肯定的な意見が多くみられた。また、今回の調査では、Zoom 等によるリモート授業への意見もあった。それぞれの授業へのフィードバックにより、より優れた授業への改善が期待され、教員の授業の工夫や学生の学び意識・態度の向上が見られた。

[課題]

以上、全体的に概ね良好であるという評価ができると思われるが、幾つか今後の課題も見いだされた。

前回の調査においては、(1) 教職の将来展望と動機づけ、(2) 講義以外の学習とレポート提出、(3) 学習環境に関する改善点、(4) 教職科目カリキュラム全体の評価の 4 点が今後の課題として示されていた。

これらの課題は、今回の調査結果からも重要であると思われたため、この 4 つの観点から現状の課題について述べていくことにする。

1) 教職の将来展望と動機づけ

アンケートから、教職に就くことを考慮する受講生は 80～90%(平均 84%)と高い一方で、強く希望する受講生は 22～32%(平均 28%)と、全体の 3 割弱である。これは前回の調査分析と同様の結果であり、就職の一つの候補と考える学生が多いことが分かる。教員になったときに授業が役立つと考える学生が多いものの(90～98%、平均 95%)、教職を志望する気持ちが強まったかという質問には 56～70%(平均 63%)が肯定的な回答をした。6 割が志望を強めているという回答

であったが、残りの 4 割は志望が弱くなったと解答している点が気になる。また、志望が明確に強まったという回答は 14～24%(平均 19%)と必ずしも高くない。教職を強く希望する受講生の割合よりこのポイントが低い点は、今後の改善が期待できるように思われる。

以上より、教職課程の授業は受講生のキャリア教育として有益であるものの、教職への志望を高めるには至っていない。教職科目の受講により、教職への感心および志望が高まり、意欲的な教職者の育成が期待される。

2) 講義以外の学習とレポート提出

アンケートの回答では、授業に意欲的・自発的に取り組むことができたという肯定的な回答が 90-95%(平均 93%)であったものの、教科書以外の書物を全く読んでいないと回答したのは 60～79%(平均 68%)であることから、受講生の意欲的・自発的な取り組みの回答については過大評価の感が否めない。レポートや課題の提出を、意欲的・自発的な取り組みと考えている可能性が考えられる。質問の順番を変え、講義に関連する書物を読んだか質問後に、授業への取り組みの質問をすることで、回答が大きく変わる可能性がある。

前回までの報告では、授業時間外の学習が十分ではないことが継続的な課題となっていた。今回の調査においても、設問 12「あなたはこの講義に関連する教科書以外の参考書やその他の書物を読みましたか」に対し、1冊も読んでいないとの回答が 57.1～78.9%と依然として多い。学生が受け身傾向にあるといえる。またその割合は 2021 年度以降、春に高く、秋に低くなる傾向が顕著である。

(特に春学期について) 授業のなかで学生が能動的に動くように働きかける工夫を行う等の課題が見えてくる。

一方で、1-3冊以上読んだとする回答は、2020 年度には 33.5-40.1%、2021 年度には 22.4-42.9%と増加傾向にあり状況の改善も指摘できる。2022 年度には 21.1-35.9%と若干減少したものの、2019 年度の 22.4-30.8%に照らせば全体としては改善傾向にある。

このことは設問 13,14 のレポート課題に関する回答の様相とも関わっている。課題が 1 つも出されなかったとの回答は、前回調査時には全体の 12.5-26.1%であったが、今回調査、特に 2020 年以降では 4.0-13.8%に留まる。他方 3 回以上との回答は 2020 年度に 77.5%に達し、2021-22 年度も 5-6 割を維持している。ICT の活用も相まってレポート課題等が増加し、結果として授業時間外の学習

を促す状況につながっていると考えられる。

課題へのコメントや返却は 6・7 割の授業でなされており、なかでもコメントや解説を伴う返却は、2021-22 年度には 26.7-36.9%に及んで増加傾向である。励みになったとの感想が多々見られ、満足度につながっているといえる。一方で、何もなかったとの回答も 3-4 割を占めている。2022 年度には 20.6%に留まって改善傾向ながら、特に指導案・授業計画など個別性の高い課題については、フィードバックを希望する意見が多く見られた。

自由記述回答では、特に 2020-2021 年度において、課題の過重負担や、提示時期、課題の指示内容の不明瞭について、改善の要望が少なくなかった。コロナ禍において ICT ツールの併用が急速に進んだことも一因であるが、アフターコロナにおいても継続的に改善すべき点である。

また、個別の意見では、提出されたリアクションペーパー・レポートに関するコメントや返却の仕方などに関して、評価する意見と改善を求める意見の双方が認められた。

3) 学習環境に関する改善点

今回の調査結果では、設問 6「教室環境、学習支援環境は十分でしたか」という質問に対して、従来、肯定率は 90%超であった。コロナ禍の 2020 年度は 84.4-86.6%に留まり、否定的な回答が 13.4-15.6%と従来 of 3 倍に及んだものの、2021 年度には肯定率が 90.1-92.0%、2022 年度には 93.8%に回復した。設問 7「質問をしたり意見を述べたりする機会」(2022 秋：質問や発表など学修内容を理解・確認する機会(授業時間外における質問の機会等を含む))については、肯定率が 2019 年度の 89.3%から、2020-2021 年度には 92.9-96.2%と大幅に改善し、2022 年度も 94.7%と高い値となっている。

個別の意見では、ICT ツールの運用に関して、授業担当者に一層の工夫を要望するコメントも寄せられた(例：資料や課題は予め NUCT / TACT など効率的に配付してほしい、丁寧に文章化された資料の読み上げは不要、授業時間を有効に活用してほしい等)。教員・学生とも ICT スキルは一様でなく一律に改善方法を検討することは難しいが、教員が指摘を踏まえて改善に務めるほか、事例の共有(FD)等によって工夫を継続したい。

4) 教職科目カリキュラム全体の評価

[コロナ禍の影響]

2020-2021 年度のコロナ禍において、講義が主にオンラインになった影響として、ICT ツールを用いて講義の事前準備がしっかりとなされたことで、シラバスに沿った講義がなされたことや、講義の出席率が増加した等の肯定的な結果が得られたが、その背景には担当教員の相当な努力があったことが予想される。一方で、教員と学生間や学生同士でのコミュニケーションが十分に取れないという問題があったのは確かである。他には、アンケートが多すぎて嫌になったとの学生からの意見もあったため、アンケートに適当に答えている可能性が有る。アンケート結果の妥当性（回収率を含めて）についても議論する必要があると思われる。

2022 年度については、コロナ禍も収束し、コロナ禍以前の状況と類似した肯定的な結果が得られており、ICT ツールと対面講義を併用することで、効果的な講義がなされていることが伺える。

[カリキュラム全体・新課程の要望]

新課程となって中学免許取得希望者の修得すべき単位数が増大した結果、2022 年度からは、負担感を訴える学生の意見も増えた。単位数の増大それ自体は致し方ないが、学生の気持ちを教員も共有することが重要である。自由記述欄では、コロナ禍にあって、「生徒間での交流ができなかったので Zoom 等による意見交換がしたかった」「オンラインで仕方がないがグループワークがしたかった」との要望がある一方で、グループワークがむやみに行われる、指示が不明確なまま作業が始まってしまうなどの意見もあった。科目ごとに適切な方法を選択し丁寧に説明して進める必要がある。

また、個々の授業担当者への感想や意見などに加えて、過去に履修した教職のカリキュラムに関する不都合や要望を書くように求める質問項目が設けられている。この欄に書かれた内容を検討したところ、新たな授業内容の要望、開講形態や日程、時間帯などに関する不都合や要望などが少なからず見られた。

特に教職科目が 5 限に開講されていること、集中講義が多いことと教職実践演習の開講時期が卒業論文執筆時期に重なっていることについて、多くの学生が不都合を訴えていた。また、学部の専門科目と一部の教職科目が重なっていたことについて、改善を求める意見があった。その場合、関係部局と情報を共有し、次期には調整が図られていた。開講時間帯および開講時期に関しては、複数にま

たがる学部カリキュラムと調整が必要という難しい点もあるけれども、今後も可能な限り調整していく必要があると思われる。各学部専門科目と教職配置時間の重なりについては、解消を図るため 2022 年度より全学教育カリキュラムが改編された。次回調査時には改善の効果が見られることを期待しつつ注視したい。休日（週末、夏季冬季休業）や卒業論文の時期に集中講義の開講が少なくなっている現状は、依然として継続的な課題である。

[その他]

アンケートの提出方法は、基本的にオンラインになってからは、参加者が少なくなっている。この課題について今後積極的に考えるべきではないかと思われる。

授業科目間での内容の重複や、教科別科目の専門性の高さ（他学部生の受講が考慮されていない等）に関して教員間の情報共有や調整を求める意見も見られた。カリキュラム全体にわたる要検討課題といえる。

以上